

1987年出土の木簡



(名古屋北部)

出土した。

9 関係文献

『新編 一宮市史 本文編 上』(一九七七年)
『新編 一宮市史 資料編補遺二』(一九八〇年)
(岩野見司)

愛知・刈安賀遺跡

かりやすか

8 木簡の釈文・内容

(1) × すくわな町
× なかしま町

× いち日の事

× [九] 日十四日十九日

× 廿九日たち申候旨

× あるべく候

× いろ／＼ニ可仕候

× 月一日

(115)×191×1 065

- 1 所在地 愛知県一宮市大和町刈安賀
2 調査期間 一九七二年(昭47)二月
3 発掘機関 一宮市史編さん室
4 調査担当者 岩野見司
5 遺跡の種類 集落跡
6 遺跡の年代 一六世紀後半～一七世紀前半
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

刈安賀は一六世紀後半に築かれた刈安賀城の城下町であり、標高約五mの自然堤防上に立地する。西尾張中央道の建設とともに排水

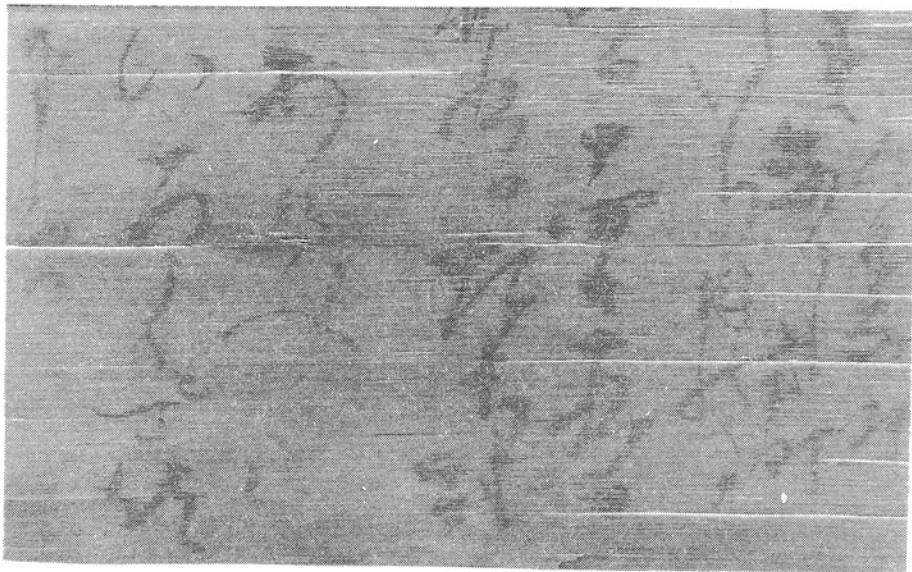
水管工事の際、遺物出土の連絡があり調査したが、遺構は既に掘削され、遺物を採集した。木簡は地表下約

一・五mから陶磁器・漆器・獸骨(イヌ・キツネ・イノシシ)などと一緒にゴミ穴

に投棄されたような状態で

出土した。

清須の六斎市に関する告知木簡である。「くわな町、なかしま町」の名前は清須・名古屋城下に存在する桑名町と長島町で、名古屋の両町名は慶長一六年(一六一二)清須から移したものである。両町名の上の一字が「す」であり、欠損部分に「きよす」とあつたものと思われる。毎月四・九の日に開かれた清須の六斎市を刈安賀の人々に知らせるべく出土地附近に掲げられたものであろう。なお、木簡の釈読は国立歴史民俗博物館塚本学・南山大学新井喜久夫両教授に負う。



苅安賀遺跡出土木簡

木簡研究 第八号

卷頭言——最後まで残る仕事——

一九八五年出土の木簡

青木和夫

概要 平城宮・京跡 平城京左京三条六坊七坪 平城京右京七条一坊十五坪 長岡京跡(1) 長岡京跡(2) 長岡京跡(3) 平安京左京三条三坊十一町 平安京左京六条一坊八町 平安京左京九条三坊十四町 平安京右京八条二坊二町 平安京右京八条二坊五町 烏羽離宮跡

伏見城跡 西ノ辻遺跡 觀音寺遺跡

大銅堂廃寺

穗積遺跡

玉津

田中遺跡

辻井遺跡

長尾沖田遺跡

但馬國府推定地

朝日西遺跡

今小路周辺遺跡

鹿島湖岸北部条里遺跡

西河原森ノ内遺跡 勸學院遺跡

金剛寺城跡

柿堂遺跡

法界寺跡

今泉城跡

富沢水田遺跡

中尊寺伝三重池跡

胆沢城跡

浪岡城跡

俵田遺跡 秋田城跡 九十九橋 一乗谷朝倉氏遺跡

三木だいもん

遺跡

弓庄城跡

番場遺跡

小島西遺跡

富田城跡

草戸千軒町遺跡

草戸千軒町遺跡

跡 尾道遺跡 備後國府跡

秋月遺跡

大宰府跡

大宰府條坊跡

豊前國府跡 如法寺遺跡

一

乘

谷

倉

倉

倉

倉

倉

一九七七年以前出土の木簡(八)

平城宮跡(第一四次・第二五次・第四〇次・第四一次・第四三次)

唐招提寺講堂地下遺構

中國簡牘研究的新動向

中國簡牘研究の新しい動向

倉札・札家考

袖井遺跡出土木簡の再検討

出土の文字資料からみた中世民衆生活の一面

草戸千軒町遺跡を中心

彙報

李 學勤

訳・菅谷文則

原 秀三郎

榮原永遠男

志田原重人

頒価 三八〇〇円 〒四〇〇円